参考

FM ちゃお収録記録（センター「つどい」　月報より）

●2021（令和 3）年度（上半期分＋10 月～12 月収録分）

№.	収録日	収集内容
1	4 月 23 日	谷口　恋 氏(アトリエさんかく) ●　経歴（現在 31 才） ・　ご実家が飲食店を営む。中学生の時に解体工事の現場を見たことや、実家の飲食店の手伝いを通じて、大人の働く姿を見て 15 才でものづくりを行うことを志す（当時、勉強は嫌だった）。 ・　高校や専門学校でインテリア関係を学ぶ。建築や木工の視点を加え内装・小物・照明器具・椅子等が存在する「空間」や「時間」にも興味を抱き、20 才の時に工務店に就職する。 ・　若干 25 才で設計事務所を立ち上げ独立。若年層が設計事務所を立ち上げることは珍しく、当時は生計を立てるのが難しかった。 ・　当時は自宅が飲食店だったこともあり、二足の草鞋として昼は二級建築士として設計事務所の経営・仕事を、夜は調理師免許を活かして飲食店に勤めた。2 年間、二足の草鞋を履き続け、現在は設計事務所で生計を立てられるようになり、昨年 6 月に法人化も果たす。 ●　谷口さんが思う「ものづくり」とは ・　一般的な「ものづくり」は物を作ることを指し、固体の物質に着目しやすい。また「モノづくり」の場合は、製品つまり生産物に対して付加価値を吹き込むことを指す（新しい開発方法を考える・より良いサービスを取り付けること等）。生産物が形あるものであれば製造業、形のないものはサービス業になる。 ・　谷口さんが思う「ものづくり」は「モノづくり」の概念に近い。その概念をさらに大きく考え、例えば、製造業の物だけではなく、飲食業の食べ物も含まれる。そして、物を取り巻く空間や時間を加えた生活の概念も含めて「ものづくり」と表現されていた。 ・　谷口さんは、「当たり前を疑いながら」を常に意識して創意工夫をしながら価値を提供していこうとされている。 ・　例えばガラス製のコップがあるとして、水を入れると飲む機能や価値がある。それを水ではなく土を入れて植物を植えると植木鉢の機能や価値が生まれる。身近な物でも機能を超えて、大きな概念で見ることで違う発想・価値が見えてくると考えておられる。先の例は大きな概念では器であり何を入れるか使用するかで名称が変わる（付加価値が生まれたことで物の名前になる）。 ・　谷口さんの「ものづくり」において、「斬新」ではなく「残心（心に残る）」になるように常に心掛けている。 ●　新しい取組み「集合施設アトリエさんかく」 ・　谷口さんが思う「ものづくり」を「集合施設アトリエさんかく」で表現をしている。 ・　名称の由来は、当たり前を疑いながら、ものづくりの価値として、突き抜けた価値をそれぞれが持つために「さんかく」とされた。 ・　個々の店舗では、店舗間の連携や相乗効果が起きにくい点と、街の方がもっと気軽に立ち寄ってほしいをコンセプトに、衣・食・住をひとつの空間に存在する場を設け、最終的には心・身体の健康という大きな概念で価値を提供しようと試みている。 ・　食は飲食を提供し、衣は衣類や小物、住は空間に加えハンドメイド（委託）を提供している。健康では 5 月にサウナを設ける予定。 ・　衣食住にこだわったのは、東日本大震災で被災された方のお話を聴くと、津波にのまれた後、始めにずぶ濡れになった身体に衣服をまとい、次に食べ物を探し確保して、最後に家に帰りたいという、人の欲求が生まれる順序を知ったからである。 ・　「集合施設アトリエさんかく」の建築物は昭和初期に出来た。自分達でリノベーションを行い、昭和初期を感じる裸電球を取り入れながら、化粧材を使わず下地材で内装を仕上げた。自分達で DIY を行った時に、街の人も手伝ってくれた。 ・　現在、社員・アルバイト・学生・お手伝いの方を含め総勢 10 名程度で運営をしている。 ●　「80（はちまる）サービス」 ・　動画を制作している。経緯は、コロナ禍で飲食店に何かお助けできることはないか考え、「集合施設アトリエさんかく」周辺にある良く行く飲食店の動画撮影からスタートをした。 ・　実家が飲食店を営んでいたこともあり、飲食店舗を開けられない辛い気持ちが、自分自身も実感できるからであった。 ・　写真撮影や動画撮影はプロに頼んでいる。また音楽を動画に挿入する方もいる。自身で編集を行い、完成した動画を Facebook で投稿している。1 人でも多く飲食店に来店して欲しい。 ・　もっと飲食店に直接支援をしたかったので、自ら 30 万円分を投じて 1 枚 1,000 ヤオ＝1,000 円と決めて、近隣の飲食店で使えるギフト券として 300 枚を配布された（やると決めて 1 週間で実施された）。 ●　最後に「活動の秘訣」 ・　「遊ぶ時の知恵が生きる知恵」になること。山登りや麻雀など趣味を通じて、新しい発想や企画が思い浮かぶ。 ・　子どものときに長瀬川でザリガニを取りに行った頃をお話しされた。 この 1 年は感謝の一年にしたい。

No.	収録日	収集内容
2	6月16日	竹元　紀子 氏(環境アニメイティッドやお　代表) ● 2年前の収録内容 ・ 環境活動にかかわるきっかけや、これまで活動してきた下記の活動に触れた。 ① 子どもエコクラブ「エコロジー美園小」 ② 八尾北高校でのビオトープ活動 ③ コットンロード・中環の森での活動 ④ 環境アニメイティッドやおでの活動。 ・ この度、環境アニメイティッドやおの代表就任により出演。 ・ 就任までの経過をお聴きした。 ● 環境アニメイティッドやおに参画した経過（2014年） ・ 2014（平成26）年に八尾北高校で開催した「環境活動交流会」（主催：環境アニメイティッドやお）に参加したことが携わるきかっけとなった。同日の午前中は、八尾北高校で「八尾北ビオトープ＆食文化体感」に携わり、午後から同会場の八尾北高校で開催されたことで参加がしやすく、「環境活動交流会」に参加ができた。それまでは環境アニメイティッドやおのことは知っていても、どのような活動をしているか知らなかった。 ・ 同年3月に環境アニメイティッドやおに入会し、翌月の定期総会に参加した。その時に感じたのは、自分自身はこれまでの美園小学校区を中心に地域に根差した活動や人間関係が中心であったが、他の小学校区や他の活動主体（市民活動団体・事業者・行政・教育機関）の方々と出会えたことにとても驚き、また様々な学びを得られることを体感した。 ● 運営委員就任までの経過（2015年～2016年） ・ 2015（平成27）年1月に「環境アニメイティッドやお10周年記念」の式典・交流会があった、たくさんの方と出会うことが出来たが、市民の参加が自分一人だけだったことに気付く。 ・ 機関紙「河内の風」の「e-clomn（イーコラム）」コーナーに寄稿することがきっかけになり、2016年1月から広報委員に就任する。 ・ 環境アニメイティッドやおの運営委員に女性の参加が非常に少ないことから、2015年8月に運営委員会にオブザーバー参加をし、運営委員に就任する（石黒美喜氏が急逝した事もあり就任）。 ・ 「一緒に企画から携われるから楽しめそう！」と思い「ハイ！」と言い続けてたら、あれもこれも携わるようになり、「いきいき八尾環境フェスティバル」も実行委員として携わることにもなった。 ● 副代表就任までの経過 ・ 2017（平成29）年に環境アニメイティッドやおの活動趣意書に記載している設立者3者の内の1者であり、また長年副代表を務めた「シャープ株式会社　健康・環境システム事業本部」が、会社の事情により退会する。 ・ 同年、副代表に大抜擢される。 ● 代表就任までの経過と組織改革（世代交代） ・ 環境アニメイティッドやおが2002年12月に研究会を発足し、また2004年12月に八尾市の協議会として設立して、早19年目、協議会としては17年目になる。 ・ 設立当初から携わるメンバーの高齢化に伴い運営者や活動する方々の世代交代を行う必要性があった。ただ前代表が退任を検討していた頃にコロナ禍になり、タイミングを図ることが難しかった。さらにコロナ禍により従来通りの運営や「いきいき八尾環境フェスティバル」の開催など、現状に十分対応しきれないと判断し、大きく体制を変えることになった。新しい時代、再スタートを切ることになった。 ・ その中で、2021（令和3）年5月31日に今回の代表交替となった。 ・ 私は以前から「所属のない市民が、環境アニメイティッドやおの代表になってほしい。」という思いがあった。まさか自分がそのお役を担うとは思っていなかった。今後は、さらに開かれた組織を目指したい。 ・ 今年度は再出発を図るために、検討会を開き、多くの方のご意見を基に代表として皆様のご意見や想いをまとめていきたいと思う。 ・ 当初から現在まで、環境アニメイティッドやおは、校区まちづくり協議会といった地域活動団体の参画・ネットワークの形成が出来なかった。これまで私は地域活動に長年携わっていたので、地域活動団体とのつながりも形成をしていきたい。 ・ 20代～40代のターゲット層を意識して、来年度2022（令和4）年度に再出発できるようにして行きたい。

No.	収録日	収集内容
3	7月7日	三代目　赤坂兵之助氏（赤坂金型彫刻所　代表） 岡田　全也（おかだ　まさや）氏（株式会社サンエイプラテック） 【第一部】三代目　赤坂兵之助氏（赤坂金型彫刻所　代表） ●　赤坂金型彫刻所とは ・　八尾市にある事業者。金型を造る、彫刻を行う。祖父が和歌山県から「彫仏師」に憧れ、戦前に大阪府に修行に出て行く。戦後は「ものづくりが戦後の復興になる」と祖父は確信していた。元々は仏具や欄間、記念コインなどの彫刻を生業としていた。 ・　射出成型によりものを製造するために金型を製作する（成型屋）。 ※　射出成型（しゅしゅつせいけい）：金型を用いた製品の成型方法。主に合成樹脂等の材料を熱で溶かし、金属の金型内に流し込み目的のものを成型する。溶かした樹脂を金型内に送り込むことから注射器で液体を注入することに似ているため、「射出成型」と呼ばれる。（出典：インターネット「モノマド」） ●　祖父が生み出した「赤坂式半月彫刻法」 ・　祖父は、不慮の事故で左手から先を失ったが、退院した日に失った左手に合う義肢をつくり彫刻を行った。 ・　左手を失い彫刻の元になる刻印（金属の印鑑）が掴めなくなった。義肢での彫刻作業はスムーズには出来ず左手の負担が大きかった。 ・　そのことから、彫刻を続けるため試行錯誤して、力を入れずに切削（せっさく：刃物を用いて材料の不用部分を切りくずとして削りとる）する手法や、今の半月一枚刃につながる鏨（たがね）の切っ先の調整方法を編み出した。 ・　その編み出した技術を「赤坂式半月彫刻法」と言う。 ※　半月一枚刃：丸棒を半分に切り落として先端を尖らせて刃をつけることで、切れ味が鋭く、切りくずが付着しにくい。金属だけでなく樹脂の切削加工にも非常に有効である。 ・　父は塾の先生をしていたが、祖父の想いや執念である「赤坂式半月彫刻法」を継承し、2代目を引き継いだ。 ・　手作業で行う「赤坂式半月彫刻法」にIotの融合技術で最新鋭のコンピュータ制御による緻密な加工技術で作成した商品をブランド「cocur（コクール）」として制作・提供をしている。 ※　Iot：Internet of Thingsの略称。「モノのインターネット」と訳され、「モノがインターネット経由で通信する」ことを意味する。従来のパソコン等のIT関連機器の接続から、スマホ・タブレットへと接続端末が広がったように、モノ（デジタル情報家電）をインターネットに接続する流れが増加している。（出典：インターネット「モノワイヤレス株式会社」） ●三代目襲名 ・　赤坂氏は子どもの時からものづくりが大好きで、小学校の時から仕事場でものを作っていた。 ・　仕事として携わり、ものづくりの才能を発揮していたが、工業用の半月一枚刃の刃を研ぐ技だけは、父や祖父を超えることができなかった。製品や素材に合わせて刃を研ぐ技術も身に付いたことで、三代目を襲名することになった。 ●生分解性プラスチック（PLA：ポリ乳酸）を使用する思い ・　祖父が「彫仏師」に憧れ、戦後は祖父の技術が工業や産業分野に求められ、ものづくりが戦後の復興に大きく貢献する中、コインなど金属成形する「プレス型」に携わり、アメリカからの樹脂（プラスチック）の輸入で、「射出成型」に従事する。 ・　15年以上前から、プラスチック素材が海中に流れ込み、海中生物を死に追いやるなど様々な環境破壊を人間は行い、世界中で話題になった。昨今も再注目され世界各国が環境対策を打ち出し始めた。 ・　赤坂氏は、2015年12月に東京八重洲で開催されたセミナーに参加し、生分解性プラスチックの第一人者とお話をして、様々な事をお教えいただいた。 ・　プラスチックが地球を汚しているから、今の30代以下の若者たちは天寿を全うできない環境下になるだろうという話を第一人者からお聴きした。 ・　また、2005年に「自然の叡智」をテーマとして、「愛・地球博（2005年日本国際博覧会）」が愛知県で開催された。その時に、生分解性プラスチックがブームになったが、生分解性プラスチックの四重苦（熱に弱い、もろい、流れにくい、コストが高い）で日本での普及が出来なかった苦い歴史を知る。 ・　でも生分解性プラスチックの四重苦を個性・特徴だと思って、活用できる商品を考えている。現在は、プラスチックが生分解される（二酸化炭素と水に分解する）利点を生かして骨壺で活用できないかと考えている。 ・　その中で、地球を汚すと言われるプラスチックを二酸化炭素と水に分解する生分解性プラスチックに転換していく事で地球環境の保全や人類が生きて行く環境づくりとして、取り組める最後のチャンスだとご本人は考えておられる。そして、私達世代が最初で最後の世代として2030年以降の地球環境保全の舵取りを今取り組みたくて、弊社の「赤坂式半月彫刻法」の技術と射出成型による生分解性プラスチックの製品作りに着手した。 ・　そんな時に、岡田　全也氏に出会う。 ※　「プラスチックが生分解される」とは、自然界に存在する微生物の働きでプラスチックが二酸化炭素と水に完全に分解されることを指す。（出典：インターネット「三菱総合研究所　生分解性プラスチックの課題と将来展望ページ」）

		【第二部】岡田　全也（おかだ　まさや）氏（株式会社サンエイプラテック） ●株式会社サンエイプラテック ・　8年前に会社を設立。それまでは保育園で保育士をしていた。その事もあり、小規模保育園の経営も当法人が行い、プラスチック射出成形等の事業と保育施設運営の事業を堺市北区で展開している。 ●三代目　赤坂兵之助氏との出会い ・　BNIで出会った。その場で赤坂氏からお話をお聞きし、シンプルに面白いと思った。そこからはまりだし、堺市第二創業促進支援事業に参加し、二代目としてどのように継承しようと思っていた時だったので、生分解性プラスチック（PLA）に取り組みたいと思った。 ※　BNI：世界最大級のビジネス・リファーラル組織。リファーラルとは、推薦・紹介・委託という意味があり、主には紹介を指す。アメリカ発祥で、2006年にJBNインターナショナル株式会社が34ヵ国目として日本に拠点を設置。経営者の参加が多い。（出典：インターネット「BNI Japan」） ・　生分解性プラスチックは手探りだった。また時代が地球環境の保全に切り替わって来ている。時代の後押しもあり、自分のやっているのは間違いないと思った。 ●生分解性プラスチックの製造時の特徴と製造に対する社員の反応 ・　プラスチック樹脂の射出成形をしているが、製造時には石油系は臭いにおいがする。一方、バイオマス由来のでんぷんと乳酸で生分解性プラスチックを製造する時は、甘いにおいがする。 ・　地球にとって嬉しい事だからと社員もそう思っているので、同意を得やすく取組みやすかった。舵を切ろうと思い、子ども達に地球環境の保全を伝えたいと思った時に、堺市教育委員会から「企業による学びのプログラム」についてお声がけをいただき、小学校へ出前授業をする機会をいただいた。 ※　バイオマス：エネルギー源として利用できる生物体、またそれらの生物体をエネルギーとして利用することを意味する。バイオマスは、太陽エネルギーによる光合成によって、自らを創り出すことのできる植物体であり、エネルギー源として利用できることから再生可能なエネルギー資源である。（出典：インターネット「日本バイオマス開発株式会社」） ●小学校での出前授業と子ども達（児童）の反応 ・　小学校では4年生から5年生にかけて社会科の授業でSDGsを学んでいて、地球温暖化や二酸化炭素の排出など環境保全についてとても受け入れてくれる。 ・　児童は率直に核心に迫った質問をする。例えば「プラスチックは、なぜなくならないのか。」という究極の質問をする。ごまかさずわかることを児童に答えている。 ・　出前授業では、プラスチックの環境負荷のお話をしているが、プラスチックの必要性を認める中で、どのように環境負荷を減らしていけばよいかを伝えている。また、静電気でナノプラスチックが集まり、PCBという毒性になる危険性があることや、プラスチックは分解をしないので、燃焼する以外にプラスチックを消す方法がないことも伝えている。 ※　PCB：Poly Chlorinated Biphenyl(ポリ塩化ビフェニル)の略称。ポリ塩化ビフェニル化合物の総称であり、その分子に保有する塩素の数やその位置の違いにより理論的に209種類の異性体が存在する。中でも、コプラナーPCB（コプラナーとは、共平面状構造の意味）と呼ばれるものは毒性が極めて強くダイオキシン類として総称されるものの一つとされている。（出典：インターネット「中間貯蔵・環境安全事業株式会社」） ●小学校での出前授業時に子ども達（児童）に必ず伝えていること ・　海・花を見てきれいなのは、当たり前ではないことを伝えている。 ・　ポイ捨てをしない、ごみを出さない。プラスチックのポイ捨てが、破砕されても分解しないまま、海を汚し、海洋生物を死に追いやってしまう。 ・　歴史的に人間は地球環境を悪くして来た。だから舵を切り替えて良くしようとやり直しているから、自信を持って生きてください。 ・　出前授業をした小学校から連絡があり、子ども達が校区内の街を歩いてごみ拾いを始めたと聞いた時に、心が熱くなり、とても嬉しかった。

No.	収録日	収集内容
4	8月18日	サスティナミニマリスト　ゆい氏 ●「サスティナミニマリスト」とは ・　「サスティナブル（持続可能性）」と「ミニマリスト」を掛け合わせた本人作成の造語。 ※ サスティナブル（Sustainable）・サスティナビリティ（Sustainability）：「人間・社会・地球環境の持続可能な発展」を意味する。サスティナブル（Sustainable）とは、本来は「維持できる」「耐えうる」「持ちこたえられる」を意味する形容詞。ただし近年は、地球環境の持続可能性、人間社会の文明・経済システムの持続可能性の意味や概念として一般的に用いられるようになる。 出典：インターネット「大和ハウスグループ」ホームページ 「What's Sustainability?」 ★「サスティナブル」の概念変遷をまとめたページとして要参考。 ※ ミニマリスト：持ち物をできるだけ減らし、必要最小限の物だけで暮らす人。自分にとって本当に必要な物だけを持つことでかえって豊かに生きられるという考え方で、大量生産・大量消費の現代社会において、新しく生まれたライフスタイルである。「最小限の」という意味のミニマル(minimal)から派生した造語。 出典：インターネット「コトバンク」ホームページ ★ 2010年以降の世界・日本での広がり、共有・断捨離との共通点、物へ対する人々の考え方、生き方の変化も要約している。 ★ 参考：インターネット「【ミニマリストでスッキリ暮らす】上手なもの選びのコツと5つの方法」では、背景・断捨離との違い、取組み方法などを紹介。 ●ミニマリストのきっかけと道のり ・　元々はズボラな性格で物に溢れ、片付けが出来なかった。 ・　きっかけは、引越し前の段ボール梱包にうんざりし、引越し後も梱包した段ボールから物を取り出さずに生活が出来ることに気付く。断捨離を始め、物を整理した。また、断捨離に関するブログを読み漁り、参考にしながら、取り組んで来た。6年前からミニマリストに目覚め、物の執着を減らし、物の少ない生活に大きく変化をした。ちなみに、引越しの際は、築45年の住宅に引越しセルフリホームを行い、当初は1階からリホーム工事を行いながら、2階で寝泊まりをしていた。 ●サスティナブル生活も取り入れた中で、気付いた矛盾と進化 ・　昨年からサスティナブルに目覚め出し、エコな生活を取り入れている。昨年からはバーチャルウォーター（仮想水）の観点も意識し、エコ・ビーガン（植物由来のみを摂取する食生活）を実践している。 ・　サスティナミニマリストとして、2年前からSNSのInstagramで投稿も始められた（昨年は食について、今年はエコ全般を投稿）。 ・　ミニマリストとサスティナブルを実践する中で気付いた矛盾がある。 ・　ひとつ目は、ミニマリストは必要最小限の物だけで過ごすライフスタイルであるが、生活習慣が変わると不要になった物を手放し、必要な物を作るもしくは購入し入れ替える。反対にサスティナブルは少しでも長く大切に物を使うライフスタイルである。持続可能なサスティナブルの考え方と不要な物を手放すミニマリストの考えが対立し、両方を実践する事で矛盾に気付いた。 ・　ふたつ目は、ミニマリストは捨てる際の罪悪感は「心の横に置いといて」と言う感覚になるが、サスティナブルは物を入れ替える際にごみを捨てたくない・ごみにしたくない思いが生まれ、対立・葛藤する。 ・　その矛盾を乗り越えられたのは、長い人生で見ると、人生でごみを排出する総量を意識するようになる。断捨離で一気に大量のごみを一時的に排出することに罪悪感が生まれる。しかし断捨離後のライフスタイルをサスティナブルな生活に切り替えることで、物と向き合い、自分を知り、無駄買いが減る生活に改善出来れば、人生でごみを排出する総量は減らすことが出来る。そのような長い目で見ると頭も心も整理が付き、「今、物を手放すと、人生でのごみの総量は減る。」という考えに進化が出来た。 ●ミニマリストの第一歩は、下駄箱・キッチンがおススメ！ ・　下駄箱・キッチンなど、置く物や置き場所が決まっている所から始めることをおススメする。 ・　反対に用途が多い物や場所は、あとで取組む事をおススメする。 ・　断捨離や整理整頓での失敗例として、先に収納場所を増やすことや、収納ケースを増やしてしまうこと。基本的な順序があり、家にある収納ケースと収納スペースだけ

		で、物を収めると決めてから、断捨離といった整理や整頓を行うと、物の少ない生活が定着・継続しやすくなる。 ・　ゆい氏は、「整理収納アドバイザー」の資格も取得されている。 ●サスティナブル・エコな取組み実践 ・　現在、ゆい氏は、湯シャン（シャンプーを使わず、お湯だけで洗髪）・肌断食（化粧水等を使わない洗顔）・服のリメーク・セルフリホーム・ごみを減らす・購入する物を減らす・中古品を活用する。これらを生活に取り入れ、定着・継続している。 ・　新しい取組みとして、バンビーノの高山さんの紹介で、高安山麓の畑をお借りして、自然農（不耕起・無農薬・無肥料・無除草により人の手を加えずに育てる農法）を始めた。エコ・ビーガンとして菜食中心の食生活が動機となり取り組みだした。また畑の土がやせているので、自然農を始めながら、自宅で排出する生ごみを庭のコンポストで堆肥化・肥料化を行うことも始める。 ・　他出演者からの提案で、サスティナブルのまちづくりとして、近隣の方とも生ごみを共有のコンポストで堆肥化し、それを畑に活用して実った作物を還元するアイデアが話に出た。この提案で出演者全員が、地域循環の可能性につながることを共有・共通認識することも出来た。 ●八尾市立リサイクルセンター学習プラザ「めぐる」でも携わる ・　サスティナブルとミニマリストに取組む中、経済・生活を考えると中々仕事が見いだせなかった。その中、個人で YouTube 動画や Instagram の作成を行っていることから、そのノウハウを「めぐる」に仕事としてお願いにあがり、現在は仕事として Instagram を投稿している。とても見やすく、読みやすい Instagram である。 ・　リサイクル教室の講師としてダーニング（カシミア・ウール素材等の服の虫食い等の繕いを刺繍する）を教え、カラフルなデザインで行う繕い方法を教えている（服飾経験もあり、それが活かされた）。 ・　個人でも Instagram と YouTube 動画の投稿・配信を行っている。 ●「めぐる」の Instagram 投稿で心掛けていること ・　3R（リデュース・リユース・リサイクル）やサスティナブル・ミニマリストなどに関心の薄い方が、少しでも興味を示してもらい、スムーズに取組みがスタート出来る入口になりたいと、いつも意識をして投稿されている。 ・　「たのしく・おしゃれに・わかりやすく」をモットーに、全ての面で知らない方に広げて行き、ターゲットを拡大して行きたい。そのような知らない方を対象に Instagram で提供をしていきたい。

No.	収録日	収集内容
5	9月17日	健康子育て支援団体　すまいる　代表　前田 智香 氏 ●設立と活動内容 ・　2011年12月に設立（つどい登録団体への申請も同年月）。 ・　子育て世代のお母さん達が市民活動団体を立ち上げた。 ・　親子の居場所づくり、イベントとして物品提供やワークショップ（例示：味噌づくり・プリザーブドフラワー・アロマ）などを行っている。 ・　親子の居場所づくりとして、毎月第3金曜日に生涯学習センター「かがやき」とのコラボで、「かがやきひろば with すまいる」をプレイルームで開催している。お月見や敬老の日といった季節に合わせた絵本を選び読み聞かせを行っている。大型絵本を図書館から借りて子ども達に絵本をめくってもらうなど、子ども達の参加も意識して読み聞かせを行っている。 ●みんなと一緒に創りあげた「わくわくまつり」 ・　来場者だけでなくスタッフも楽しみつながることを目的とし、有料のブースだけでなく、子ども達が一日楽しめるよう無料で遊べるブースや参加型の舞台なども盛り込んだ。また数年前からは、プリズムホールレセプションホールで開催をして来た。 ・　終日会場に居る学生さんが一緒に子ども達と遊んでくれ、子育て中のお母さんが出展しやすいイベントとなった。 ・　出展者・関係者だけで100名を超え、会場設営は主催者ではなく、ほぼ出展者・関係者が主体的に動き協力をしていただいた。 ・　主催者が出来ないところを、出展者・関係者に助けてもらい、みんなと一緒にイベントを創りあげて来た。 ●大人女子がトキメキ、さらに元気になる「スマイル*サロン」 ・　子育て中のお母さんは、どうしても視野や生活が狭くなり、社会との接点を持ちにくくなる。お母さんが元気なら、家庭が明るく家族みんなが元気になる。 ・　そこで、お母さん達から「こんなん作れるよ！」「こんなんやってみたい！」の声を聴き、主催者2人がモニター兼参加者になって、講座やワークショップにチャレンジ出来る場として「スマイル*サロン」を開催している。場所は「Café ふらここ（八尾市本町1丁目）」で実施。 ・　子育て中の方や子育てが落ち着いた方など幅広い年代の方が一緒に集えるようゆる～くお喋りする場として開催。 ・　講座や、雑貨・アクセサリーなどを作るワークショップやロハスを意識した「味噌まるづくり」のワークショップを行いながら、お母さん達がトキメいたり、気晴らしになったりと、さらに元気になる場を提供して、今月で丸5年になる。 ・　ワークショップのひとつに、その場でパーツを選び、即興でイヤリングを作るワークショップでは、すぐに出来上がるすごさと喜びが湧く。主催者からも参加者からも好評なので、季節の変わり目を見て半年に1回は継続して講師に来てもらっている。 ●SNSのInstagramでライブ配信：「ゆる～く」やさしい取組み ・　昨年からのコロナ禍で、「わくわくまつり」の開催中止を関係者全員に一斉に連絡をしながら、個別でもていねいに連絡やコミュニケーションを取りながら、みなさんからの温かい言葉をいただきながら、「コロナ禍で何かつながれることはないか？」と思い、リモートの活用と同じようにInstagramでライブ配信を始めた。 ・　ライブ配信では、生活の知恵に関するお話や、絵本の紹介といった「やさしい取組み」を双方向でやりとりをしている。参加された方からは「声が聞けて、顔が見れて、ほっとした！」とコメントをもらい、ふさぎ込んでいた方へ少しでもお役に立てて、嬉しかった。これからもゆる～く参加してもらい、ラジオの聞き流し感覚で気軽に参加をしてもらっている。 ●「スマイル*カフェ」の再開 ・　毎年3月と7月に八尾市役所本館地下1階の「Pica Pica」でワークショップ中心のイベントと「Pica Pica」の食事を楽しむ両方を楽しんでもらっている。 ・　7月は久しぶりに開催することが出来た。 ・　Instagramのライブで、可能な範囲で出展者の方に顔出しをしてもらい、イベントのPRとともに出展者同士も関係性づくりに役立てた。 ・　「ゆるゆる」とした取組みで、カラーセラピー、アートセラピー、パステル体験、ヘッドマッサージ、フットマッサージなどを出展内容は多岐にわたる。 ●活動をするにあたっての「モットー」 ・　今後は大人向けの絵本ひろばも開催していきたい。子育て中は、子ども中心の子育てになってしまい、どうしても自分のことを大切にし忘れる時がある。 ・　そのような事を思い出してほしいという思いから「育自のための小さな魔法」という

		ワークショップも行っており、子育て中の方はもちろん、そうでない方も、自分を大切にし、それが広がって、優しい社会になればいいなと思う。 ・　活動を行うにあたって、「私たちが楽しくないと続かない。」と思っている。まずは自己満足することで、細く長く続けられると思う。だから活動にお誘いし、わくわく出来るので、人が寄って来て、お互い楽しみましょうとなる。 ●「元を知る」ことの大切さ ・　スマートフォンの普及で、絵本を読む機会や手作りを行う機会が減り、生活の価値観の変化があらわれている。 ・　季節を知る、手を動かして作る、ゆっくりと過ごすスローライフなど、生活の元を知る「生活自身をていねいに！」を大切にしたい。生活にメリハリもあらわれ、より生活が楽しくなると思う。そのような事も活動を通じて伝えて行きたい。

No.	収録日	収集内容
6	10月24日	八尾市健康推進課　辻合　悠氏 ●出演の経過 ・　辻合氏は、以前から「つどい」に来館されていた。 ・　「環境アニメイティッドやお」を「つどい」で知り、事務局（環境保全課）の新葉氏のことをお聞きしていた。 ・　八尾市の職員となり、環境保全課とも電話でのやり取りを行う際に、新葉氏と電話上でやり取りを行っていたが、面識はなかった。 ・　先日も「つどい」に来館された際に、新葉氏とお会いしたことがないことを知り、「つどい」はつなぎ役として、出演提案を行い、今回の出演で初めてお会いすることが出来た。 ●八尾市の職員採用までの経過 ・　社会にどう出ていけるか不安だったのと、就職活動に積極的に身を置けず、和歌山市で居場所づくりの活動を創り「食べていこう」と甘く考えて活動を始めたが、断念。その後、唯一受けることのできた試験が生まれ育った八尾市の市役所であった（9月に願書を出す）。 ・　最終面接まで進んだが、補欠合格者として1次採用には至らなかった。大学院生の末として教員免許を取得していたこともあり、2ヶ月だけ支援学校の先生を明石市でされ、就職先がなかったため引き続き、学校現場で働こうと考えていた。 ・　そんな中、2月の終わりに八尾市役所から連絡があり、採用者が相次いで八尾市役所の内定を断られたことで、補欠合格者の最下位だった自分にまで職員採用のチャンスが巡り、八尾市に就職することが出来た。 ●辻合氏の活動の原点 ・　幼少期から八尾市南高安小学校区で暮らす。当時は現在よりも周辺には農地が残っており、幼少期は良く畑や田んぼに遊びに行っていた。また祖父母が枝豆や若ごぼうの栽培を中心とする農家だった。 ・　今を形づくる原体験は、中学校時代に自分と関わってくれた先生の人間的な関わりにある。漠然と憧れを持って大学は教育学部を志望し、縁あって和歌山の大学へ進学した。また大学時代はアメフトをしていて、2年間は素敵な仲間達と日夜練習する青春時代も過ごす。 ・　しかし、右ひざの大きな怪我で引退に至る。少しして、自分のぼんやりとした言葉にならない教育の営みについてもっと考えたいと「学校教育」ではなく「社会教育」の道に進む。そこが、自分の学生活動・市民活動・研究活動・ボランティアの原点・出発点になった。今も社会教育は自分の中に大きな存在として位置づけている。 ・　実践にもっと触れて、言葉をもっと編んで行きたいと、神戸の大学院に進学。障害や共生という言葉、地域づくりやESDという言葉と向き合い、その言葉を体現しようと活動に邁進していた。 ※ ESD：「Education for Sustainable Development」の略で「持続可能な開発のための教育」と訳す。 ESDとは、現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動。 ESDは持続可能な社会の創り手を育む教育である。 【出典：インターネット「文部科学省」】 ●活動の出発点は、和歌山での「わかまなび」 ・　大学3回生の時に社会教育と出会ってから、和歌山で小学校の統廃合で廃校になった和歌山県のかつらぎ町、天野地域を舞台に、地域での活動を通じて学ぶサークル「わかまなび」を立ち上げた。大学を超えて30名程度の学生が集まり、地域の人たちに学び、子ども達と遊ぶ中、みんな元気を取り戻していくみたいな活動だった。自身は、社会教育を掴めるかもしれないと思いながら、3年程主軸で携わり、現在はOB生を中心に再組織化した和歌山ユネスコ青年部の代表を務めながら、活動を応援している。 ・　わかまなびの活動が生まれた経緯は、全国的にも教育学部が実務的な教員養成が主流

となり、「教育ってなんだろう」と学問的に問える場が少ないことが背景にあった。また、社会教育ゼミで出会った実践、「学びの郷 KÔKÔ 塾」という和歌山県立粉河高校の教育実践をもとに、大学生版の活動を展開した。KÔKÔ 塾では、「本物に触れる」ということに教育活動の価値を大きく置き、高校生たちが主人公となり活動していくことを、高校・大学・地域が連携し、学びの場を創っている。

●市民活動団体「ゆらそら」と居場所「あーち」

・ 「わかまなび」の活動の中で出会った地域の人達や、神戸で出会った和歌山県橋本市出身の後輩と、市民活動団体「ゆらそら」を立ち上げた。

・ インクルーシブに関わる映画や、環境問題に関わる映画を通じて、教育をテーマとした対話会、環境について考え合う会の開催をしている。「ゆらそら」には、「当たり前」を「私を大切にしながら揺らそうよ」という意味を込めて、みんなで名付けた。現在、メンバーを中心に、オルタナティブスクールである「つくるがっこうイホルラ舎」という「学校に行きづらい子たち」の学び場を一緒に作っている。「イホルラ舎」には、「いつでも、ほっと、るんるん、らんらん」できる場所にしたいという当事者である子どもたちの願い、「庵る（いほる）」という「子どもたちが学校とは違う仮の宿を取り、回復していくこと」を願う大人たちの想いがある。春に和歌山県橋本市の古民家を改装しつつ、プロジェクトが進んでいる。

※ 「オルタナティブ」とは（辻合氏の解説）：「既存の価値とは違う豊かな価値を生み出す可能性を有していること」というイメージを持っていただけると嬉しい。原語としてはイヴァン・イリイチという哲学、教育学者で、イリイチは「脱学校化社会」や「脱病院化社会」など、著作で「制度に人が依存させられ、非人間化（画一化・非主体化）していく様を批判し、当時大きく支持を集めた。

※ オルタナティブスクール（Alternative school）：ヨーロッパやアメリカの哲学的思想をもとに発展していったオルタナティブ教育を取り入れた学校のこと。画一的な教育ではなく、個人を尊重し子どもが本来持っている探求心に基づいて、自律的・主体的に学習や行事が展開されるようにカリキュラムが組まれていることが多いのが特徴。大人は教師ではなく、あくまでも子どもをサポートするスタッフという考えが根底にある。

【出典：インターネット「All About20th あなたの明日が動きだす」】

・ 神戸では、障害のある子どもを中心としたインクルーシブな居場所づくりとして、居場所「あーち」に 4 年前から携わる。

※ インクルーシブ：「包み込むような／包摂的な」となる。「インクルーシブ」は「ソーシャル・インクルージョン」（社会的包摂）という言葉から来ており、これは「あらゆる人が孤立したり、排除されたりしないよう援護し、社会の構成員として包み、支え合う」という社会政策の理念を表す。

【出典：インターネット「（一財）アジア・太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪）ホームページ」

●八尾に帰って来てからの活動

・ 「つどい」に顔を出すようになり、色々な方にお会いする機会をいただき、結び目が結んでいく出会いの場になっている。以前は、古民家で食べて行きたい（生計を立てたい）思いがあった時に、「つどい」で紹介してくれたのが、自宅近くにある「茶吉庵」だった。「茶吉庵」では「ビブリオバトル」のイベントに実行委員として携る。

・ 八尾に帰って来てからは、取り立てて何かをしているわけではない。身近な活動として、「ごみが落ちていたら拾うぐらいのこと」をしている。大阪市内だが、交差点付近になぜか弁当ガラが捨てられていて、それを拾い処分もした。

●個人の意識の限界と社会のあり方（ごみを拾わない要因とは）

・ ごみ拾いひとつでも、個人の意識の問題が指摘されるが、個人の意識にも限界があり、社会のあり方を考え、仕組みを良くする事が大切だと思う。

・ 物事に取組む前に、少し立ち止まって考えることが大切だと思い、そんな「立ち止まる」機会をつくる社会の仕組みが必要だと思う。

・ 忙しい方、苦しい方ほど、「立ち止まれない」という社会を一緒に良くしていく事が、環境問題にもつながっていくかもしれないと思う。

・ ESD は、「議論（discussion）」ではなく、「対話（dialogue）」を通じて「Sustainable（持続可能）」と「Development（開発）」という、一方では「次の世代に残していく」、一方では「生産し、新しいものや価値を生み出していく」という水と油のような概念を「education for（教育の営み）」で考え合うということ。先に述べた「立ち止まる」機会をつくることに関係するが、「既存の知識を身に着け

		る」学び方ではなく、当たり前として学んできたことを「学びほぐしていく」（アンラーニング：Unlearning）のような学び方を通じて、個人も社会も継続的な成長を遂げていけたらと思う。 （上記に関連し「社会教育には自己紹介の連続だよ。」と教えられ、自己紹介 WS を開催し、「自己紹介が嫌い」という声から、対話的な営みを通じて、大切にしたいことが何か改めて認識できた体験談も辻合氏からお聴きした。） ※　「アンラーニング」（unlearning）：いったん学んだ知識や既存の価値観を批判的思考によって意識的に棄て去り、新たに学び直すこと。日本語では「学習棄却」「学びほぐし」などと訳される。個人や組織が激しい環境変化に適応して、継続的な成長を遂げるためには、いわゆる学習（ラーニング）と学習棄却（アンラーニング）という 2 種類の一見相反する学びのプロセスのサイクルをたえず回していくことが不可欠とされる。 【出典：インターネット「日本最大の HR ネットワーク　日本の人事部」】

No.	収録日	収集内容
7	11月4日	World Seed　岡見 厚志氏 八尾市リサイクルセンター学習プラザ「めぐる」　藤原　ゆい氏 ●岡見 厚志氏の活動紹介 ・　一度びんで使用した後、リサイクルされる「ワンウェイびん」が増え、ビール瓶の様に繰り返し使え循環する「リターナブルびん」の使用量が減って来ていた。 ・　「リターナブルびん」は、洗浄し繰り返し使えるリユース活動であり、またリサイクルが不要であることから、リサイクル時に使用する際のエネルギー消費や二酸化炭素の排出がないクリーンであり、そしてエコであり、社会的意義がある。 ・　World Seedでは、その意義を広めるために独自に「と、わ（To WA）」を開発・商品化をされ、現在でも奈良県を中心に洗浄され繰り返し使用されている。 ・　環境保全の実践活動だけに留まらず、サポート・支援役というコーディネート支援（中間支援）も意識して取り組まれており、その代表的な取組みが「天神祭ごみゼロ大作戦」である。 ・　廃棄物の排出量ゼロを目指す「ごみゼロ」に取組む市民活動団体は、大阪府下でも多いが、京都の「祇園祭ごみゼロ大作戦」のような市民参画でかつ市民活動団体同士が一致団結して取り組むことは、大阪府下ではこれまでになかった。 ・　また2000年代に市民活動として「イベント会場でのごみ分別と3R」の実施が定着化し落ち着きを見せる中、大阪市内のイベントで一番ごみ排出量が多く、全国から露天商が集まり、町中が露店で並ぶ「天神祭」における「ごみ分別と3R」の実施に着手する。着手にあたり、市民活動として事業実施の立上げをコーディネート支援された。 ・　主には2016年に現状調査を実施され、調査結果から取組むべき3R活動として、①リユース食器・コップの導入、②エコスーテションで来場者自ら分別を行う資源のリユース・リサイクル化、③会場内の清掃活動の3点を活動主眼に置き取り組まれた。 ・　2017年は天神橋～天満橋北側エリア限定で上記3点を実施。2018年・2019年は、大川を北上し毛馬橋手前のエリアまで合計8エリアまで拡大し実施された。 ・　2019年は、1.2トンを資源化する事が出来、リユース食器約2万食分を提供しリユースの推進とごみ減量に成功した。また清掃活動により、祭り終了後の会場のポイ捨て・散乱ごみの抑制・意識啓発につながった。 ・　これまで市民活動が主催するイベント会場以外で、大々的に取り組まれた事で、市民活動が主催するイベントへ参加する事がない市民に大々的に啓発を行い、市民主体でごみゼロ社会を創りあげられることを魅せることが出来、多くのエコ実践者を広げる取り組みにつながった。 ※　3R：3つのRをこころがけることで、ごみを減量することができる。①Reduce（リデュース）：ごみを出さない。②Reuse（リユース）：繰り返し使う。③Recycle（リサイクル）：再資源化する。　3Rは順番も大切。まずは、ごみを出さないことが第一（リデュース）。次に、まだ使えるものは、ごみとして出さずに繰り返し使う（リユース）。それでも出てしまったごみは分別して資源として再利用する（リサイクル）。 【出典：インターネット「八尾市ホームページ」】 ●藤原 ゆい氏の活動紹介 ・　消費社会に疑問を持ち、ミニマリストとして実践を行い、近年は環境・エコに興味を抱き、ミニマリストに加えサスティナブル（持続可能性）として、「サスティナミニマリスト」の名称を設け、実践中。 ・　特に、エコ実践を気軽に始められるために、わかりやすさを大事にされ、YouTube動画（登録数7,000名強）やSNSで配信をしている（インターネットでの検索で調べるよりも、Instagramで調べる人が増えていることから、Instagramでの配信に力を入れている）。リサイクルセンター学習プラザ「めぐる」のInstagramの配信を担っている。 ・　ごみ分別・3Rが好きな人が一人でも増えればと思い、まずは自分でやってみて、自分が好きになることを心掛けている。意識や空気感が伝われば嬉しい。また、もう一つ心掛けていることは、意識を外に向けるのではなく、自分に対して矢印（意識）を向けることを大切にしている。広告・ネット・SNSの各種媒体では、いいもの・キラキラするものを発信して、ついつい追いかけてしまう。過去の自分と今の自分の変化や

		成長などに矢印を向けることにつながる情報発信を大切にして行きたいと思う。 **（藤原ゆい氏の活動紹介は、8 月放送分の出演時の情報収集を要参考）** ●出演者全員でフリートーク（意見交換：ごみを出さないための暮らし方） ・ 生ごみリサイクルの取組みとして、神奈川県葉山町で誕生した生ごみ処理器「キエーロ」は、画期的で生ごみが水分と二酸化炭素に分解されて固形物が消える。これまでの EM ぼかしをコンポストに投入して堆肥化する生ごみリサイクルとは異なり、堆肥活用など使用先がない方にも取り組みやすい。また日当たりや風通しなど考慮すると本当に匂いもない。 ・ 「天神祭ごみゼロ大作戦」では、来場者とのトラブルがなく、ごみ分別に協力をしてくれた。これは環境教育・環境学習を通じて市民の環境意識が全体的に高まっている。また、分別しているから、リサイクルしているからごみを排出しても良いと言う意識の方が意外に多いことに驚かされる。まずはごみが出ないようにいらない物はもらわないなど、次のステップに意識を高めてもらえればと思う。 ・ 京都で量り売りを提供している店舗があり、ゼロ・ウェイストマーケットとして、京都市上京区の株式会社斗々屋が展開している。またイオンで導入されている「LOOP」が提供するガラスやステンレス製の繰り返し使える容器で商品販売、容器を回収・再利用で、ごみを減らすサービスが展開されている。 ・ ごみを分けて、ごみを燃やさないという市民のエコ意識は高まっているが、エコ実践が出来る受け皿や仕組みづくりが追い付いていない。 ・ 「2：6：2」の法則は有名だが、「6」の大衆であるエコ意識が高まり、ボトムアップが進んで来た。今後も、上の「2」が引き続き、「6」に啓発を続けて、市民活動として仕組みづくりに貢献できればと思う。 ・ SNS でのやり取り・情報発信以外の啓発や公益性として、リアルな活動を行う必要性を感じている。 ・ 亡き師匠 越道が昔言っていた言葉「俺たちが、すぐにごみを収集する事で、市民にごみを忘れさせてしまった。それは俺たちのせいだ。」を思い出す。ごみを排出する時に、次の役割に向けて、分別して、気持ちよく送り出したい気持ちや意識を持ってほしい。 ・ 「ごみは汚い」という意識から「分ければ、ごみはきれい」という意識と実感する方が一人でも多く広まってほしい。 ・ ごみ分別・3R 活動は、「物を大切にする」に到達すると思う。これは、道徳的・倫理的に加え、最近出てきている非認知能力を伸ばす事にもつながると思う。 ・ ごみを出さない生活をして、焼却ごみが週 2 日排出する曜日があるが、月 1 回の排出ですんでいる。エコ意識が高まると、ごみを出さなくて良いことに気持ちも楽になり、手間もいらない事に気付かされている。 ・ リユースびんに傷がついていることをメーカーが嫌がり、ワンウェイびんに移行した経過があるが、リユースびんの傷があるのは、それだけ何度も循環している証拠なので、そのことに理解や共感する消費者が大半だと思うので、メーカー側の意識の変化が必要だと思う。 ●【つどい担当者独自解説】市民活動における大阪市内の 3R 活動の経過 ・ 天神祭を開催している大阪市における家庭形・事業系一般廃棄物の排出量は、バブル経済に沸いた 1991（平成 3）年に 218 万トンを排出し、当時は焼却処分から分別・リサイクルに転換するのに後れを取った印象が強く、また 3R の意識が高くない市民・企業気質もあった（2018（平成 30）年現在、分別・リサイクルが進み 100 万トン以下にまで排出量が減少）。 ・ その時代背景があってか、廃棄物の排出量ゼロを目指す「ごみゼロ」に取組む市民活動団体は、大阪府下でも意外と多い。 ・ 市民活動では、「イベント会場でのごみ分別と 3R」として、「特定非営利活動法人ごみゼロネット大阪」等の市民活動団体も実行委員として参画したイベント「市民フェスタおおさか（大阪城公園太陽の広場）」では、2004 年からエコステーションを設け、6 分別による 3R 活動に取り組まれた。2006 年には 13 分別によるリサイクル化と「特定非営利活動法人地球環境デザイン研究所 ecotone」の協力による「リユース食器・コップ」を導入し、大阪市内で初めて会場内に洗浄機を搭載し洗浄することで繰り返し使用・循環するごみ減量（リユース）の取組みを実施。結果的に社会実験にもなり、以後のリユーススタイルが、大阪府下のイベント会場（中之島フェスティバ

		ル、ワンワールドフェスティバル等）で広がりを見せ普及・定着化する。八尾市内では、2007 年度の「楽しい環境活動支援金」を活用して、八尾高等学校の文化祭でも「特定非営利活動法人地球環境デザイン研究所 ecotone」の協力によりリユース食器・コップが導入された。 ・　会場には「エコスーテション」を設け、排出するごみを資源に変えるために分別のアドバイスを受けながら、来場者自らが分別に協力してもらうシステムも導入し、来場者・出展者にリユース・リサイクルの実践体験を通じて、ごみ減量の意識啓発を行って来た。 ・　近年の「天神祭ごみゼロ大作戦」まで連綿と続くこれらの市民活動は、ごみ減量の定着化に貢献をしながら、大阪における「ごみゼロ社会」の将来像をイベント会場・祭りで市民に示し、大きく貢献をして来た（2007 年には長居競技場で開催された「世界陸上」でもエコスーテションが設けられ、市民参画による運営が行われた）。 ・　また、これらの活動において、八尾市内で活動する市民活動団体及び若年層の協力・参画が大きく影響をしている。 ※　一般廃棄物：「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」の第 2 条第 2 項において、産業廃棄物以外の廃棄物をいう。主に家庭から排出される生ごみや粗大ごみなど（家庭系一般廃棄物）を言う。そして、オフィスから排出される紙くずなどの可燃物やレストランなどの飲食店から出る生ごみなど事業活動に伴って排出されるもの（事業系一般廃棄物）も該当する。一般廃棄物は、各市町村（行政）が処理責任を負っていて、それぞれ廃棄物処理計画に従い、収集・運搬し及び処分するとされている。 ※　産業廃棄物：事業活動に伴って生じた廃棄物を指す。特定の業種に限定して排出される廃棄物（紙くず・木くず・繊維くず・動植物性残さなど）や、業種を限定せず排出される廃棄物（燃え殻・汚泥・廃油・廃酸・廃アルカリ・廃プラスチック類・金属くず・ガラスくず、コンクリートくず及び陶磁器くずなど）に分けられる。事業者は、廃棄物の区分に関わらず、その事業活動に伴って生じた廃棄物を自らの責任において適正に処理しなければならない。「事業活動」には、自治体や学校、NPO、地域活動などの活動も該当する。 【出典：インターネット「産業廃棄物許可代行なら行政書士・加藤木剛 K’s office」】

No.	収録日	収集内容
8	12 月 2 日	ジュエルキッズ　阿瀬 慶子 氏 八尾市リサイクルセンター学習プラザ「めぐる」　藤原 ゆい 氏 ● 阿瀬氏が環境活動を始めたきっかけは？ ・ 楳図 かずお原作「漂流教室」を基に制作されたテレビドラマ「ロング・ラブレター～漂流教室～」で、地震が起きてなぜか砂漠同然の未来世界にタイムスリップするドラマを視聴して、その影響で地球環境に対するエコ意識を持ち始める。 ・ 子どもを授かり、小学校でのこどもエコクラブに関わった事から今日の環境活動につながる。 **（阿瀬氏の活動紹介は、昨年 2 月放送分の出演時の情報収集を要参考）** ● 藤原 ゆい氏の普段からごみを出さない実践は？ ・ 6 年前にミニマリストとして、ものと向き合って来た。日常は無料でもらえるものも自分にとって必要なものかを考え、時には断る勇気を持ちながら、不要なものを家に持ち帰らない実践をしている。 ・ 自宅の郵便ポストに「ポスティング、お疲れ様です。でもチラシお断りです。」とポストに貼っておくと、チラシの投函が激減して分別の手間が減った。 **（藤原氏の活動紹介は、8 月放送分の出演時の情報収集を要参考）** ● 出演者の片づけと掃除の特徴 ・ 阿瀬氏は、片付けは苦手。掃除は好きでマメ。 ・ 藤原氏は、片付けは得意。掃除は苦手でスボラ。 ● 掃除が苦手な方へ（エコに掃除をするコツも） ・ 専用の洗剤を購入せずに、クエン酸と重曹で掃除をする。その事で洗剤の個別購入の削減や洗剤容器の削減につながる。洗剤の管理も楽。 ・ 使い捨てを出来るだけ使用せずに掃除をしたいので、ボロボロになったタオルやフキンをウエスにして掃除に使い切る。ちなみにタオルの方が汚れは落ちやすい。 ● 掃除が好きでマメな人の日頃の掃除（気づいたら、すぐする） ・ 日頃の調理・洗濯等の家事中に気付いた汚れは、その場ですぐに汚れを拭きとる、掃き出す。日常のちょっとした行動の積み重ねで年末の大掃除は大きな汚れが少なく、大掃除の手間・エネルギーをかけずにすむ。掃除が好きでマメだからこそできるコツコツ掃除。 ●名言「使い捨てがストレス」 ・ 使い捨てをなくす習慣が身に付き、使用したウェットティッシュも掃除で使いる。ウェットティッシュで掃除をすると油が良く取れる。 ・ 物を大切にすることが使い切る気持ちを育む。 ●ものを捨てる時に「自分との約束をする事」「自分を知る事」の大切さ ・ ものを大切にする分、捨てられないというジレンマもあった。これは前々回出演した際にお話したが、廃棄でたくさんのごみが生まれるが、これは将来においてごみを生まないために生活を改める行動であり、そして捨てる事を減らすと自分自身に約束をする。その事で、人生において捨てる総量を減らすといった長期間で物事を考えるようになった。結果、自分自身の心の整理とものの整理が出来た。 ・ 整理が出来た事で、自分に必要なものは何かがわかるようになった。そのことで必要なものだけを買物することが出来るようになった。自分自身のものに対する好みもわかるようになり、自身のライフスタイルの確立が出来た。 ●「貧乏くさいは環境に良い」 ・ マスクづくりでは使用しなくなったマスクのゴムを活用したりする。 ・ 「貧乏くさい」で思いついたが、食事の時に玉子かけごはんがお茶碗にといた玉子が残るので、味噌汁をお茶碗に入れてお箸でお茶碗についたといた玉子を取ると、お茶碗がきれいになって皿洗いの時に水を汚さなくなる。昔からある生活の知恵である。 ・ 登山では食事をする際に、山に水を捨てられないので、器に水を入れて器をきれいにするのは同じ行為である。だが、家庭ではその事はしていないことに気が付いた。 ●日頃から掃除を考えて心掛けていること ・ ものを減らすことで、床にものを置かなくなる。その事で苦手な掃除もスボラでも掃除が出来るようになる。また、掃除道具を減らすことも苦手な掃除に対して億劫にならずに取組みやすくなる。 ● 日頃のエコ実践は経営でもある「人生の経営者は自分だと置き換えて」

		・　日頃のエコ実践で、ものと向き合うことで無理・無駄・ムラがなくなることは、会社でいう在庫管理や業務の見直しにつながる。整理してみて「なくていけるやん！」の発見・気付きを得られる。不要なものを買わないことは経費の削減・家計の節約にもなる。会社で言う経営感覚は、実は家庭で育むことが出来る。家庭も会社も共通している。 ・　経営を自分の人生に置き換えて、自分にベクトルを向けて、どんな人生を過ごしたいか（自分経営）を考えてほしい。 ・　「なくていけるやん！」の一例として、冷蔵庫の無い生活を１年間過ごしたことがあった。夏以外は生活に支障が出る事はなかった。 ●　家族との合意形成・家族の変化 ・　ものを整理して捨てることに対して、人が変わったかのように家族ひとりひとりが整理をする事に、前向きに考え取組むようになった。 ・　家族も自分の事と向き合うこと、ただひたすらそれだけだという事に理解を示してくれるようになった。 ・　小学生の子どもにものと向き合うことを教えていて、少しずつ整理・整頓が身に付き始めている。 ・　子どもの頃に整理・整頓の教育を受けてこなかった親世代から見て、子どもの時からものと向き合う教育を受けられて、とてもうらやましい。 ・　「ごみ屋敷」に行政代執行として、ごみの撤去を行う映像をテレビで見る事がある。しかし時が経つとごみ屋敷に戻ってしまう。これは本人の意識の問題である。本人のいる・いらないの意識づくりが必要。 ●ものを減らすコツは（大きなものを減らすなど） ・　大きなものを減らすコツとして、一旦、倉庫や納戸に保管して生活をしてみる事。先ほどの話につながるが「なくていけるやん！」と生活に支障が出なければ、気持ちも整理が付き、廃棄する事が出来る。 ・　10ヶ月間、衣服のいる・いらないを一着ずつ向き合って来たが、飽きが来てしまい、あるタイミングでガサっと整理をした。 ・　ものが減り、ものが増えないために、繰り返し使えるリユース容器の必要性に気付かされる。その容器分だけものが増えるが、長期間で見るとものを減らす大切な行動である。 ●この１年の振返りと次回以降（来年）の放送について告知 ・　出演者及び出演者が携わる団体の話をじっくりお聴き出来た事で、情報収集として記録に出来た。非常に充実した収録の１年になった。 ・　出演を機会に出演者自身の活動の振返りや活動の洗い出し、目的・原点の見つめ直しにつながった。有意義な収録が出来た１年だった。 ・　次回から「環境アニメイティッドやお」に携わって来られた前運営委員といった前役員のみなさんにスポットを当てて、ご出演いただく。 ・　これまではラジオ収録による音声で記録を残していたが、次回からは動画撮影も行い、映像でも記録に残し、YouTube 動画で配信を行う（動画撮影で緊張するかもしれないが、これまで通り雑談・フリートーク形式でのお話・収録を大切にして行きたい）。 ・　「環境アニメイティッドやお」の協議会名称を変更する検討が、現在の運営委員で話し合われている。今後の名称変更の可能性も意識して、来月からの収録タイトルを「環境アニメイティッドやお アーカイブス」とした。このタイトルだけでも「環境アニメイティッドやお」の協議会名称を残すことも記録化の一環とした。